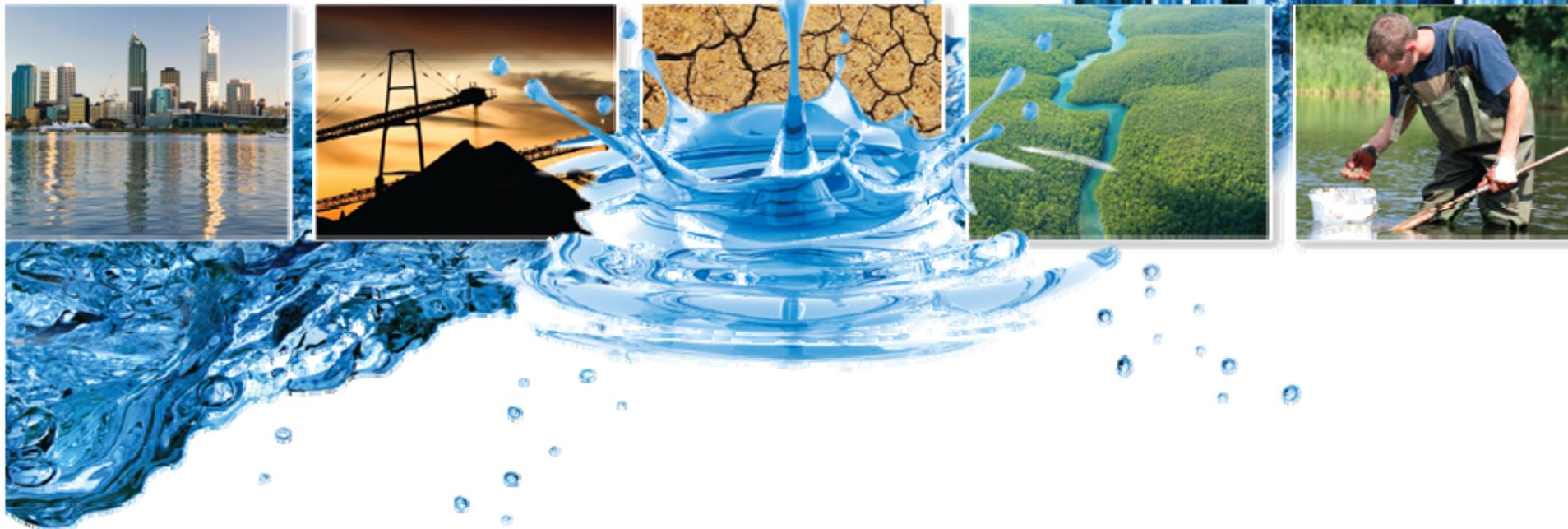


13th International Riversymposium

Perth - Australia 11 - 14 October 2010



第13回国際河川シンポジウム 参加報告 (2010年10月11日～14日：オーストラリア国パース)



日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局

目次

1. はじめに
2. 「国際河川シンポジウム(International Riversymposium)」とは？
3. 「第13回国際河川シンポジウム」の討議テーマ
4. 主要行事 及び 主なセッションの参加報告
5. “Riverprize”の概要 及び 2010年の受賞河川
6. 展示ブースの紹介
7. シンポジウム運営面のノウハウ紹介
8. 本シンポジウムに参加しての感想

別冊資料：講演アブストラクト集



Swan川から眺めたパース中心部

1. はじめに（参加目的）

International Water Forum（オーストラリア政府系NGO）が毎年主催する「国際河川シンポジウム(International Riversymposium)」がオーストラリア国パースにて2010年10月11日～14日に開催され、JRRNが事務局を担うARRNのPR及び河川再生分野の最新の知見を得ることを目的として参加する機会を得ました。

河川再生(River Restoration) 分野に関わる最新の国際動向、また日頃あまり接することのないオーストラリアの河川を取り巻く諸事情等、本シンポジウム参加を通じ得た知見を簡単にご紹介させていただきます。

◆International Riversymposiumホームページ：

<http://www.riversymposium.com/>

2. 「国際河川シンポジウム(International Riversymposium)」とは？

河川再生に関わる誇れる成果を交換し共有するための国際イベント！

International Riversymposiumは、オーストラリア政府系NGO「International Water Forum」の年次行事として1998年から始まり、本年で13年目となります。

河川管理に関わる豪国内及び世界の成功事例を、行政機関・公益組織・研究者・技術者・地域コミュニティ・事業者等で共有する機会を提供することを通じ、河川及び流域の生態的・社会的価値をより高めることを目標とする行事です。

また本シンポジウムでは、毎年「国際河川賞(Riverprize)」として優れた河川再生活動が1事例表彰され、河川分野で名誉に当たる賞の一つとして世界的に認められています。

【International Riversymposiumの目標(Goal)】 ※開催趣旨からの直訳です

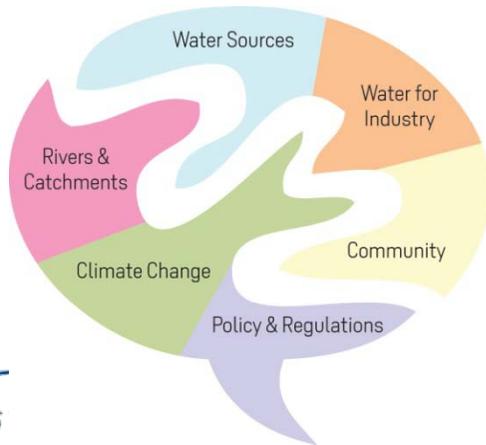
- 1)人類の水に対する要求を持続的に満たす「生態系の健全性」を改善することを目的とした世界における革新的かつ最良の経験を、会議参加者に提供し、理解を促進すること。
- 2)生物多様性を保全するために必要な流量に関わる生態学の科学の最新の知見を提供すること。
- 3)ネットワーク、ビジネス交流、水関連事業のパートナーシップを促進すること。
- 4)人類と生態系が必要とする適正な水の管理に関し、会議参加者が、より専門知識を備えた意思決定者となり、もしくは意思決定者に対しよりの的確に働きかけることができるようになること。

3. 「第13回国際河川シンポジウム」の討議テーマ

第13回目となる本年のシンポジウムは、表流水・地下水・仮想水・再生水・環境流量など水利用面の視点、地域参画といった活動主体セクターからの視点、また気候変動などリスク管理の視点など、様々な切り口で河川再生に向けた豪国内及び諸外国での取組みが扱われました。

学術交流を主な目的とした他の国際学会と異なるのが、研究や要素技術の紹介のみならず、現場での活動成果や技術適用例といった「達成成果」「効果」を行政・市民団体・実務者が同じ土俵で議論する点にあります。

よって、各15分の発表に対しセッションごとに30分の討議時間を設けるなど、経験を共有することを主目的としたプログラム構成になっているのが特徴です。



【討議テーマ一覧】

- Moving water on a grand scale - water transfers
- Stopping the water moving – dams and barrages
- Moving water virtually – virtual water
- Moving water for the environment - environmental flows for rivers and estuaries
- Movements in hidden water – groundwater challenges
- Moving water across borders – transboundary rivers
- Placing value on rivers - valuing ecosystems, economic development and water markets
- Moving water multiple times – water in mining to manufacturing
- Letting water move naturally – wild rivers
- Moving together for better water management – community engagement
- When rivers don't move - droughts
- Moving water through cities (urban theme)
- Moving closer to the sea – estuaries
- Movement to and within waterways
- Watching water move
- Desalination – impacts and new technology
- Climate change and rivers

4. 主要行事及び主なセッションの参加報告

開会式や基調講演などの諸行事、及びセッションにおける主な内容について以下に概要をご紹介します。（赤字部分の概要を紹介します。ただしRiverprizeは次章で扱います。）

【全体プログラム概要】

10/11（月）

8.00am - 9.00am

会議登録 (Registrations)

9.00am - 10.30am

開会式及び基調講演 (Opening Plenary)

11.00am - 5.30pm

セッション（分科会）(Sessions)

5.45pm - 7.30pm

歓迎懇親会 (Welcome function)

10/12（火）

8.30am - 5.30pm

セッション（分科会）(Sessions) or ツアー (Study Tour)

7.00pm - 11.30pm

河川賞授賞式典 (Riverprize Gala Dinner)

10/13（水）

8.30am - 5.30pm

セッション（分科会）(Sessions)

10/14（木）

8.30am - 10.30am

セッション（分科会）(Sessions)

11.00am - 12.30pm

河川討論会及び閉会式 (Closing Debate)



シンポジウム会場



シンポジウム会場横のSwan川

4. 主要行事及び主なセッションの参加報告

【1】開会式

10月11日（月）午前には本シンポジウムの開会式が盛大に開催されました。

左右のスクリーンにオーストラリアの河川を取り巻く諸問題を象徴する写真がスライドショーで表示される中、アボリジニのショーから始まり、続いてアボリジニの代表の方による最近の深刻な河川の状況や歴史的な川との関わりといった川への思いが語られ、その後会議主催者であるChairpersonからの開会挨拶という非常に凝った演出でした。



開会式の様子



開会挨拶の様子



開会挨拶：Dr.Stuart Bunn, Griffith Univ.教授

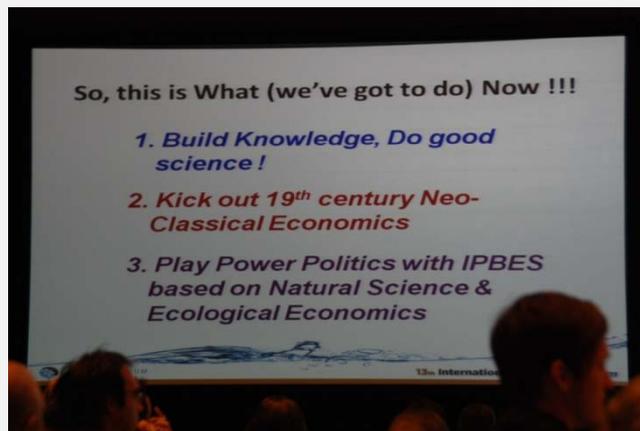
4. 主要行事及び主なセッションの参加報告

【2】開会式基調講演

開会挨拶に続いては、オランダと韓国より二つの基調講演が行われました。

- ◆講師：Dr. Leon Braat（オランダ・Wageningen Univ.）
- ◆タイトル：Social and economic consequences of global post 2010 biodiversity policies
- ◆概要：

生物多様性をテーマに、まずは現状把握として世界で何が起きているかを1700年から2050年までの変化を中心に解説。続いては、なぜ我々が生物多様性保全に取り組む必要があるのか、更には今後行うべき取り組みについて、Ecological footprint, water footprint, ecological-economical model, COP10名古屋などをキーワードに説明。



オランダ講師からのメッセージ

- ◆講師：Ms. Pil Shim（韓国・国土交通海洋省河川再生特命大臣）
- ◆タイトル：Revival of Rivers: A New Korea
- ◆概要：

1990年代からの韓国における河川再生の取り組みの歩みを説明の後、韓国の気候変動リスク、水を取り巻く今後の課題の概要を説明。その後、現在韓国が推進する4大河川再生事業について、6分の動画（PRビデオ）を交えて紹介。



韓国河川再生担当大臣の講演の様子

4. 主要行事及び主なセッションの参加報告

【3】個別セッション

様々なテーマに関する論文発表が行われましたが、今後の日本の河川再生分野で活用できそうな内容を中心に、個別セッションで扱われた一部を以下でご紹介します。

- ◆セッション名： Moving together for better water management – community engagement
- ◆講演者： Ms. Siwan Lovett(Australian River Restoration Centre), Dr. Stuart Orr(WWF International)等
- ◆概要：

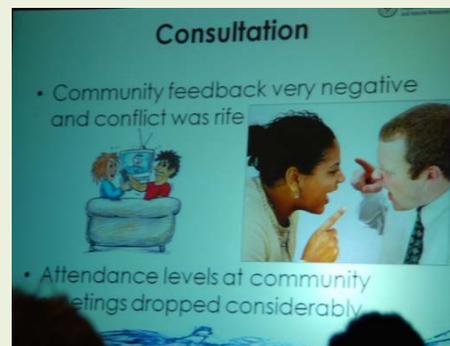
オーストラリア河川再生センター(ARRC)代表を務めるSiwan氏からは、一般市民の水管理への関与の重要性を説いた上で、行政等が中心となる諸活動を一般市民とともに推進していくための手法（心理学的アプローチ、ナレッジマネジメント、実生活に落とした経験共有等々）とその実践が紹介された。

また世界自然保護基金のOrr氏からは、河川管理への民間セクターの関与に関わる調査結果を中心に、水問題解決への民間セクターへの期待と今後の動向について発表された。

更に、南オーストラリアにおける地域協働による河川再生の取組み紹介として、行政主導の事業推進の限界、衝突発生メカニズム、市民が河川再生事業に参加していったプロセスなどについての実際の活動内容が紹介された。



民間セクター参画のトレンド



利害関係者衝突の調整



住民参画実績

4. 主要行事及び主なセッションの参加報告

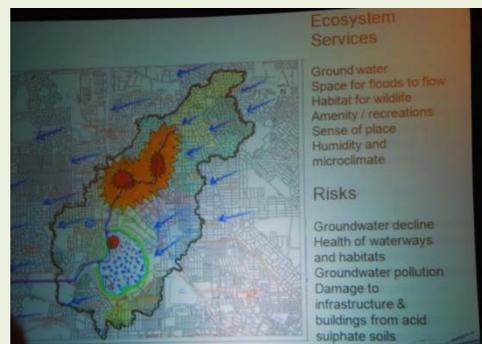
【3】個別セッション

- ◆セッション名：Moving water through cities
- ◆講演者：オーストラリアの地方自治体職員、州政府職員、NGO職員等
- ◆概要：

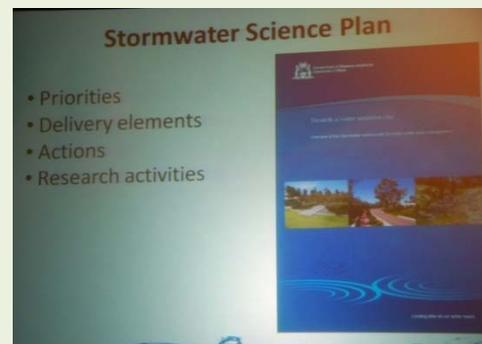
「Water Sensitive Urban Design(WSUD)」に関するセッション。直訳すると「水に敏感な都市設計」となるが、「水に配慮した都市計画」として、オーストラリアで20年ほど前に登場した概念の説明、具体的な取組み、技術指針、自治体での適用事例等に関する事例が多数紹介された。

日本においても「総合治水計画」や「雨水利用」など、類似概念や実際の取組み（事業・製品）は既に存在するが、こうした技術体系を「WSUD」として確立し、それらを推進する組織が出来上がっている点などは注目に値する。

- <http://www.wsud.org/>
- <http://wsud.melbournewater.com.au/>
- <http://www.urbanwater.info/index.cfm>
- <http://www.marrickville.nsw.gov.au/environment/water/sensitiveurbandesign.htm>



都市が抱える水要素の体系整理



州政府発行の技術指針



Ipswich市発行のWSUD技術指針

4. 主要行事及び主なセッションの参加報告

【3】 個別セッション

- ◆セッション名：Water for the future: Preparing Australia for a future with less water
- ◆講演者：Dr. James Horne (Department of Sustainability, Environment, Water, Population and Communities, Australia) 等
- ◆概要：

オーストラリア政府の水分野の取組みに関わる講演。政府として水関連分野を集中的に推進するため、2010年9月に大幅な省庁再編を行い、National Water Initiative(国家水戦略)に関する概要説明が行われた。(オーストラリア政府の水分野の取組みは以下のホームページ参照)

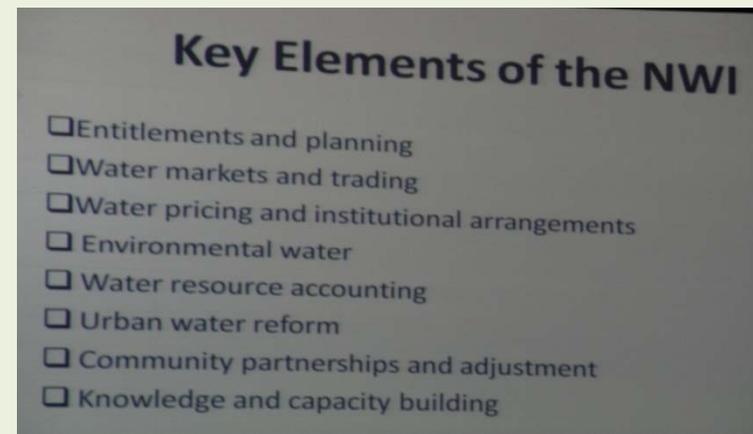
・ <http://www.environment.gov.au/water/>

また、オーストラリアで初となる「水分野の教育」を目的としたホームページがクイーンズランド大学研究者グループによって設立され、オーストラリア国内の行政機関・自治体・関連機関の水教育に関わる関連情報（Water education resource）が集約されている。

・ <http://www.environment.gov.au/wet/>



講演の様子



オーストラリア政府の国家水戦略の要素

4. 主要行事及び主なセッションの参加報告

【3】個別セッション

- ◆セッション名：The importance of storytelling to share knowledge
- ◆主催者：Australian River Restoration Centre and International River Foundation
- ◆概要：

河川再生事業への住民参画や合意形成推進のツールの一つとして期待される「Story telling（物語伝達）」について、その概要、具体活用例、関連情報に関し、ワークショップ形式で議論。

日本の河川事業において、各河川の歴史を含む物語として丁寧に整理し、それを住民とともに共有しながら今後の川のあり方を見出す取組みはまだまだ発展途上にあり、合意形成のツールとして期待できる。シンガポールではStorytellingに関する国際学会が毎年開催されるなど、学問的な手法として確立されつつあるツールとのこと。

- <http://storytellingsingapore.com/>
- <http://www.storynet.org/>



ワークショップの様子

Free Resources

<http://australianriverrestorationcentre.com.au>
Storytelling page that takes you through a mini-workshop on using story

Also link you to the ARRC Information & Knowledge Resource Kit <http://ikrk.rrc.com.au/> more on storytelling theory as well as the story spine, running anecdote circles and a lot more!

National Storytelling Association

ARRC also runs workshops covering a range of topics relating to 'Connecting through Conversation'

ARRC（オーストラリア河川再生センター）情報源

4. 主要行事及び主なセッションの参加報告

【3】 個別セッション

- ◆セッション名：Moving water for the environment - environmental flows for rivers and estuaries
- ◆講演者：アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドのコンサルタント、州政府、NGO等
- ◆概要：

アメリカにおけるサーモン復活を目的とした河川再生の取組み、またオーストラリアにおける環境流量保全の事例、またニュージーランドにおける統合流域管理（ICM: integrated catchment management）による地域と生態系再生の取組みが紹介された。

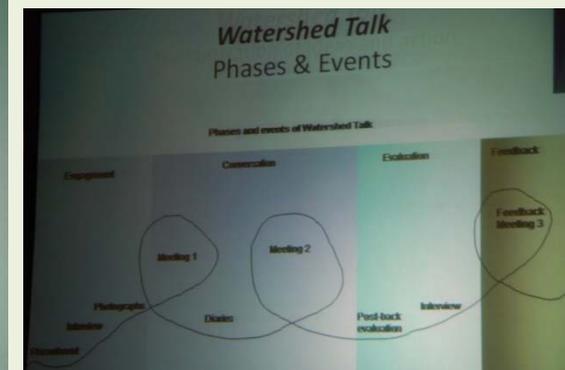
既に世界的に「統合水資源管理(IWRM)」の概念は確立されているが、ニュージーランド講師による講演では、特に「住民参画やパートナーシップ構築」を主題とした統合流域管理プロセスを示している点が注目に値する。



スポンサーを明示したプレゼン表紙



ICMのサイクル



流域内での対話の発展プロセス

4. 主要行事及び主なセッションの参加報告

【4】 河川討論会

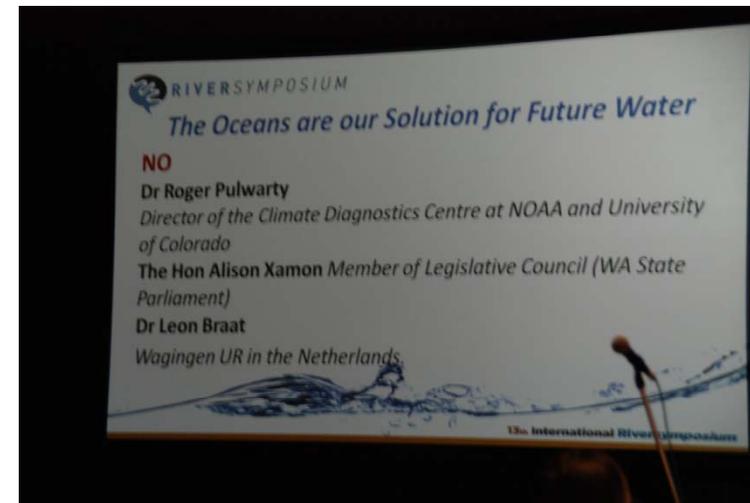
本シンポジウム最終日(10/14)の閉会式を前に、恒例となっている「河川討論会」が以下をテーマに開催されました。

「“海”は未来の水資源の解決策になるか？」

上記に賛成する有識者3名、及び上記に反対の有識者3名が左右に分かれて座り、それぞれの主張を討論する形で実施されました。まずは計6名によるプレゼンが各7分ずつ行われ、続いては各チームの見解を30秒で改めて表明。最後には、会場の拍手の数で本討論の勝者を決めるという欧米的は進行で、結果的に海の利用に反対の立場をとるチームが勝者となりました。



左右に分かれた討論チーム



勝利をおさめた「海依存反対」チーム

4. 主要行事及び主なセッションの参加報告

【5】閉会式

10月14日（木）昼に本シンポジウムの閉会式が開催されました。

資金・人材面で様々な組織のサポートを受け開催されている行事ゆえ、閉会式では、基調講演者・豪政府・州政府・支援財団・運営協力大学・資金協力企業等々、順にロゴを示しながらこれら協力者（貢献者）へのお礼を示す内容でした。



資金協力団体へのお礼（例）



シンポジウム主催者代表による閉会挨拶

5. “Riverprize”及び本年の受賞河川

International Riversymposiumでは、各分科会での論文発表に加え、オーストラリア国内及び海外の優れた河川再生活動を「国際河川賞(Riverprize)」として各1河川(流域)ずつ表彰し、本年は国内・海外より各4団体が最終選考に進み、10分間の最終プレゼンに基づく審査の結果として12回目となるRiverprizeが選定されました。

Riverprizeの概要、これまでの受賞河川、及び2010年最終選考進出河川概要と表彰式の様子をご紹介します。

【1】 Riverprizeとは？

海外の優れた河川再生の取組みを表彰するInternational Riverprizeは1999年より、またオーストラリア国内の優れた河川再生事例を表彰するNational Riverprizeは2001年よりはじまりました。

これまで日本の河川では、2000年に鶴見川(旧「建設省」としてノミネート)がInternational Riverprizeの最終選考まで進みましたが、受賞歴はありません。一方、アジアでは2002年にメコン川が、また2006年には中国のSha川が受賞し、本年も中国の黄河が最終選考まで進んでおります。

なお、International Riverprize受賞河川にはAU\$350,000(2,800万円)、National Riverprize受賞河川にはAU\$200,000(1,600万円)の賞金がオーストラリア政府及び豪政府系NGOのInternational Riverfoundationより授与されます。



最終選考会の様子

2009年までの国際河川賞 (International)

Thiess International Riverprize Winners

- 1999 – River Mersey, UK
“THE RIVER THAT CHANGED THE WORLD”
- 2000 – Grand River, Canada
“A GRAND ACHIEVEMENT”
- 2001 – Blackwood River, Australia
“CHANGING BEHAVIOUR, CHANGING RIVERS”
- 2002 – Mekong River, South-East Asia
“THE LIFEBLOOD OF SOUTH-EAST ASIA”
- 2003 – Alexander River, Israel
“A RIVER BUILDING A BRIDGE FOR PEACE”
- 2004 – Siuslaw Basin, USA
“FISH, FORESTS AND THE KITCHEN TABLE”
- 2005 – Drôme River, France
“A RIVER SAGA WITH SAGE”
- 2006 – Sha River, China
“BACK TO A ‘RIVER OF LIFE’”
- 2007 – Danube River, Europe
“THE ‘BLUE DANUBE’: A BLUEPRINT FOR COLLABORATION”
- 2008 – St. Johns River, USA
“THE UPPER BASIN - AN IMPORTANT CENTRE OF BIODIVERSITY”
- 2009 – Lake Simcoe, Canada
“BACK TO A ‘RIVER OF LIFE’”

5. “Riverprize”及び本年の受賞河川

2009年までの豪国内河川賞(National)

National Riverprize Winners

- 2001 – Goulburn Broken Catchment, Victoria
“THE GOLDEN VALLEY OF THE GOULBURN BROKEN”
- 2002 – Merri Creek, Victoria
“THE RETURN OF THE KINGFISHER”
- 2003 – Hunter River, New South Wales
“BORN ON THE BANKS OF THE HUNTER RIVER”
- 2004 – Wallis Lake, New South Wales
“FARMING WITH A ‘GREEN’ VISION”
- 2005 – Bulimba Creek, Queensland
“SUCCESSFULLY CREATING AN URBAN WEB OF GREEN”
- 2006 – Torbay Catchment, Western Australia
“DEEPLY CARING FOR THE LAND”
- 2007 – Murray Wetlands, New South Wales
“REJUVENATING THE DYING RIVER RED GUM COUNTRY”
- 2008 – Lake Macquarie, New South Wales
“CONNECTING THE COMMUNITY WITH THEIR COASTAL ESTUARY”
- 2009 – Oxley Creek, Queensland
“MANY HANDS HELPING CREEK WATCH”

5. "Riverprize"及び本年の受賞河川

【2】2010年のRiverprize最終選考進出河川（豪国内4、海外4）について

Congratulations to the 2010 finalists (listed alphabetically) –

National Riverprize

- Cooks River, New South Wales: The Cooks River Foreshores Working Group is facilitating a collaborative program to resuscitate one of Australia's most polluted, yet iconic, river systems – the Cooks River in Sydney's inner southwest.
- Derwent Estuary, Tasmania: The Derwent Estuary Program is a regional partnership between the Tasmanian Government, six councils, five businesses, scientists and the community to address the issues of heavy metal contamination, nutrient enrichment, introduced species and habitat loss in the Derwent estuary.
- Hattah Lakes, Victoria: The Mallee Catchment Management Authority is reviving the Hattah Lakes along with the threatened plants and animals they support, in Hattah-Kulkyne National Park, 60 kilometres south of Mildura, Victoria.
- Lake Illawarra, New South Wales: Since 1988, the Lake Illawarra Authority has been restoring Lake Illawarra, focussing on addressing water quality issues, along with improving seagrass beds and saltmarsh meadows.

International Thiers Riverprize

- Hattah Lakes, Australia: Reviving the drought-ravaged Hattah Lakes in Australia has been a visionary project led by the Mallee Catchment Management Authority as part of a sustained effort to restore better health to a system of semi-permanent freshwater lakes within Australia's Murray Darling Basin.
- River Thames, England: Pollution of the UK's second longest river left it biologically dead in the 1950s, but since then many organisations, currently driven by the Environment Agency, have helped transform the river into a thriving ecosystem teeming with fish, and with a returning salmon and otter population. Submitted by Environment Agency
- Smirnykh Rivers Partnership, Russia: With Sakhalin Environment Watch as one of the lead agencies, the Smirnykh Rivers Partnership, a long-term, broad-based public-private partnership, has achieved lasting and substantial gains in protecting and restoring the ecological health of the eastern (Okhotsk Sea) coast of Smirnykh District of the Sakhalin Region in the Russian Far East.
- Yellow River, China: China's Yellow River faces many extreme challenges from water shortage, serious water pollution, to serve and frequent flooding. In 1999 the Yellow River Conservancy Commission (YRCC) was empowered to manage the entire river. Within 10 years, YRCC has made remarkable progress in balancing water allocation and availability with social, economic and ecological developments.

5. “Riverprize”及び本年の受賞河川

【3】2010年のRiverprize受賞式典

10月12日（火）夜に、2010年のRiverprize受賞式典を兼ねた夕食会が開催され、本年は以下の河川が受賞しました。

- ◆海外：イギリス・テムズ河の再生（River Thames, UK）
- ◆豪国内：Derwent河口域の再生（Derwent Estuary, Australia）

特にInternational Riverprizeを受賞したロンドンのテムズ河は、第一回受賞のイギリス・マーシ川同様に、都市化と工業化の中で一度は生物的に死の川となった川の半世紀スパンの河川再生の取組みが認められ、日本における隅田川などと多くの共通点がありことから親近感が湧きました。



授賞式の様子



受賞後のテムズ河のプレゼンテーション（翌朝）

6. 展示ブースの紹介

河川再生に関わるオーストラリア国内及び国際機関の紹介、及びビジネスマッチングを目的とした展示ブースの概要をご紹介します。

【展示ブース出展団体一覧】

- Australian Government Department of Sustainability, Environment, Water, Population and Communities
- Australian Water Association
- CSIRO
- Department of Regional Development and Lands, WA
- DHI Australia
- eWater CRC
- Greenspan/MCE
- International RiverFoundation
- International WaterCentre
- Murray–Darling Basin Authority
- Swan River Trust
- Tetra Tech
- Thermo Fisher Scientific
- Thiess Services & Thiess
- Torbay Catchment & Blackwood Basin Groups
- Unidata
- The University of Western Australia



International Riverfoundation



International Water Center

7. シンポジウム運営面のノウハウ紹介

本シンポジウムは、準備段階から開催当日を含め、その運営面においても非常に参考となりました。行事運営面における様々な工夫や丁寧な取り組みの一部をご紹介します。

◆開催前からの参加者との密な連絡

大会のメーリングリストに一度登録が完了すると、事前登録済みのアナウンス、当日の主な行事の事前広報、各参加者のホテル情報、登録支払状況、ホテル～会場までの送迎バス時刻表、詳細プログラムの更新状況等々、あらゆる情報が完璧に、かつ十分な時間的余裕を持って送付されてきた。

また、シンポジウム会場に到着後の流れについても丁寧に指示が事前送付され、PPTの受け渡し等が現地で迷うことなく行うことができた。

◆講師プロフィールの事前把握

アブストラクト提出時に、発表予定者の詳細肩書に加え、これまでの河川分野での活動履歴の詳細を提出し、それらが発表当日の座長に事前共有されており、また会議主催者としての情報源として蓄積されていた。

◆講演者への事前のマニュアル配布

アブストラクト執筆要領や講師への諸注意事項（行事開催趣旨の再確認、プレゼンでの注意事項、PPTテンプレート提供、論文提出やPPT提出方法等々）を事前にマニュアルとして丁寧に参加者へ示すことで、開催当日のトラブル回避が図られていた。

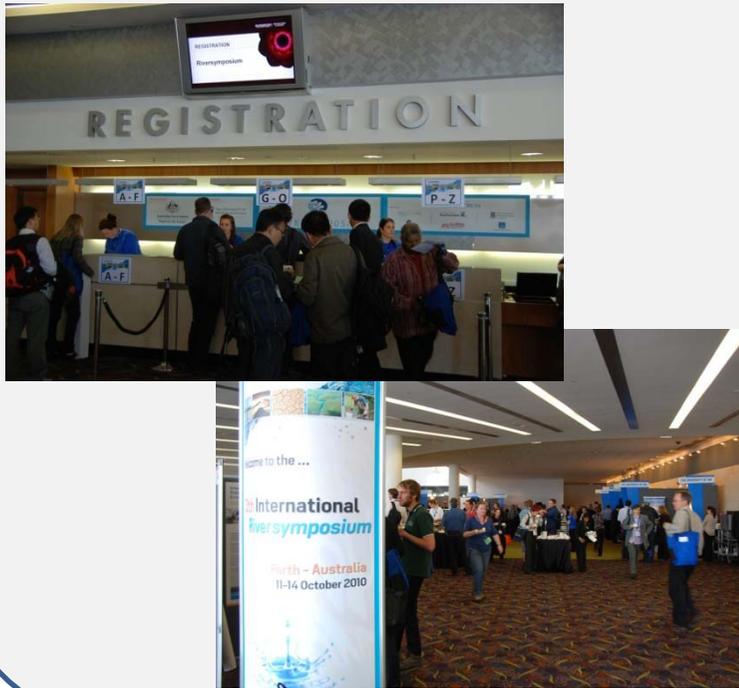


7. シンポジウム運営面のノウハウ紹介

◆スムーズな登録手続きや会場内移動

開会式の開始前に混乱することの多い登録手続きだが、十分なスタッフ、及び周到な参加者情報の管理のため、短時間での登録手続きが完了した。

また会場内のどこで何が行われているかの案内も徹底しており、目的の行事会場を容易に見つけることができ、会場内の移動、及びバスによる市内から会場への移動も含めスムーズに進んだ。



◆スポンサーへの徹底した配慮

資金面及びスタッフ面で、オーストラリア政府をはじめ、多くの産官学組織に支援され運営されているため、行事開催中及び展示ブースなどでスポンサーに配慮した掲示がいたるところで見ることができた。



◆時間に厳格なプログラム進行

ほぼ全てのプログラムが、司会進行（座長）の厳格なタイム管理のもと、スケジュール通りに進行された。

午前及び午後のコーヒープレイク、及び昼食時間帯の終了時間には鐘をもったスタッフが周回し、セッションが開始することをアナウンスし、参加者もスムーズに会議室へと移動していった。

7. シンポジウム運営面のノウハウ紹介

◆ 質疑応答を優先したプログラム構成

参加者の経験を共有することを主目的とした行事のため、各セッションでは発表時間は15分と限られ、一方で、各セッションの講演者全員による討議時間として30分が必ず確保されていた。

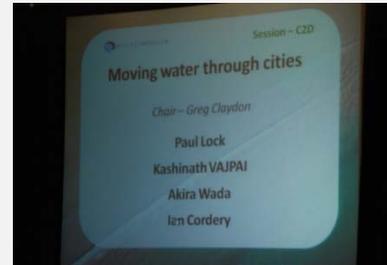
参加者への事前配布資料（Speaker's Guideline）においても意見交換を重視する趣旨説明が明記され、一方通行の情報発信（発表）ではなく、発表者と聴講者が共にセッションを運営するスタイルが全プログラムを通じて実施されていた。



◆ 発表PPTの徹底した事前チェック

発表日前日までに各講演者は発表準備室にPPTファイルを提出することが事前に求められ、発表準備室には専門スタッフが複数配置され、PPTの表示確認や文字化け確認等が丁寧に行われた。

また事務局受け渡し後のPPTファイルはファイル名をルール化されて管理され、セッション開始のスクリーンよりすべてのファイルがリンクされているという徹底したファイル管理が行われていた。



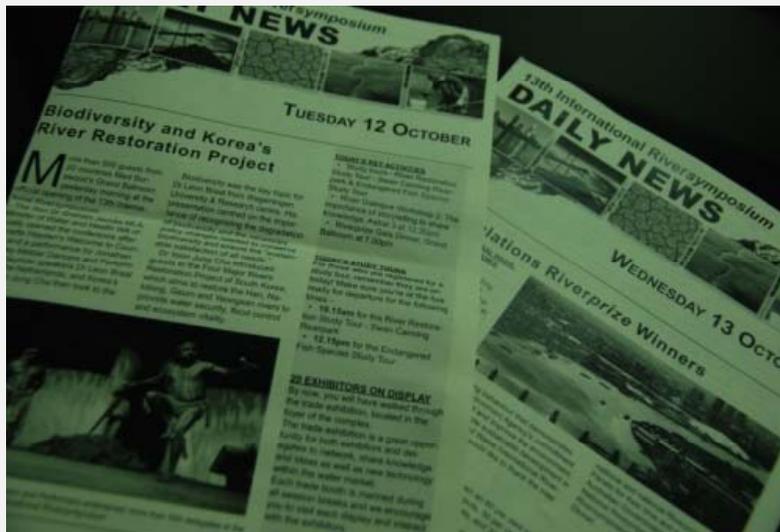
発表準備室



7. シンポジウム運営面のノウハウ紹介

◆速報ニュースレターの配布

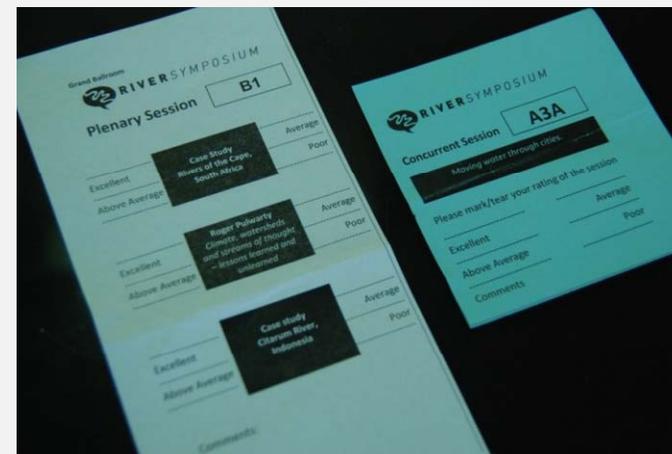
シンポジウムにおける前日の出来事を速報として取りまとめた「13th International Riversymposium DAILY NEWS」が毎日配布され、前日の主な成果や重要な出来事を参加者で共有することができた。



◆各セッションの評価実施

基調講演及び各セッション前に、参加者に対しては「評価フォーム」が配布され、「Excellent, Above average, Average, Poor」のいずれかを参加（聴講）者が評価する仕組みが導入されていた。

本評価の結果は次年度以降のプログラム構成に反映されるとのことで、継続的に質を高める取組みとして注目に値する。



評価フォーム

8. 本シンポジウムに参加しての感想

本年度で13回目となる*International Riversymposium*に参加する機会を得て、専門分野及び行事運営の両面で貴重な知見を得ることができました。

主催国であるオーストラリア及びCommonwealth（英国連合体）メンバーであるインド・カナダ・イギリスからの参加者が多数を占め、加えて豪が資金・技術面で支援を行う途上国関係者も主催者に招かれる形で参加していました。また特筆すべきは、中国から約12名、韓国から8名が参加する中で、日本からは昨年同様に3名（内1名は豪居住者）のみという少々寂しい状況でした。

日本が培った本分野の様々な蓄積を、海外での取組みから得られた新たな知見も参考に質を高めながら日本全国で活用し、また同時に世界（特にアジア）においてその存在感を持続的に発揮していく上で、こうした国際行事への参加の価値を改めて感じました。

本行事への参加を通じて得た知見は、今後のJRRN及びARRN運営に生かしながら、日本を含むアジアにおける水辺再生の担い手の出会いの広場（横断的な連携基盤）の構築を目指していきたいと思えます。



第13回国際河川シンポジウム 参加報告 (2010年10月11日～14日：オーストラリア国パース)

発行日： 2010年10月20日（水）

発行： 日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）

事務局（連絡先）： 〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 ロフテー中央ビル7階
財団法人リバーフロント整備センター内

Tel: 03-6228-3860 Fax: 03-3523-0640 E-mail: info@arrn.net URL: <http://www.arrn.net/jp/>

※JRRN/ARRN事務局は、「アジア河川・流域再生ネットワーク構築と活用に関する共同研究」の一環として、
財団法人リバーフロント整備センターと株式会社建設技術研究所が運営を担っています。